

まつりが育む地域の力

ソーシャル・キャピタルとしての “まつり”の可能性

伊多波 良雄

Written by
Yoshio Itaba

同志社大学経済学部教授

*はじめに

祭りと言えば、京都三大祭り、大阪三大夏祭り、東北三大祭りなどがすぐに思い出される。祭りは、最初は祭礼として行われてきたが、今では異世代間の交流、地域活性化、伝統文化の継承など、さまざまな機能を持つものとして期待されている。日本の祭りは、小さいものも含めると相当な数になると思われる。祭りを紹介している佐藤・保田編(2006)によると約千になる。このような祭りはどのような機能を持つのだろうか。祭りとソーシャル・キャピタルの関係を探りながら、祭りの持つ可能性を検証し、その経済効果を見てみる。

* コミュニティレベルでの ソーシャル・キャピタル

ソーシャル・キャピタルの代表的議論として、

コールマン(1988)とパットナム(1993, 2000)の議論を挙げることができる。

パットナムは、ソーシャル・キャピタルは互酬性、信頼性を伴う社会的ネットワークであると捉えている。パットナムは、イタリヤの北部と南部の経済状態の違いを説明する際に、信頼と協調を基礎とした社会構造が北部にあり、このことが北部の南部に対する経済的優位をもたらしていると述べている。いわば、コミュニティのレベルでのソーシャル・キャピタルに注目している。

パットナムによると、ソーシャル・キャピタルには結束型と橋渡し型がある。結束型は、コミュニティ内部の結束を強化する機能を持つっており、橋渡し型はコミュニティ間の関係を強化する機能を持つ。

● 結束型の祭り

通常、祭りには年寄りから子どもまでが参

加し、このことによつて住民の一体感が醸成される。このようなことから祭りは、パットナムが指摘するように結束型と捉えることができる。上野(2009)は、熊本市西部の銭塘校区自治協議会を対象としたコミュニティネットワークの研究で、次のように指摘している。それは、当該地域の自治会や宗教・祭りグループなどのグループ内で人々が出会う頻度を見ると、宗教・祭りグループは3番目に高い頻度であること、自治会と宗教・祭りグループの間に強い関連があり、宗教・祭りグループは自治会に次いで協議会構成グループ間を媒介する機能を高く果たしているということである。こういう指摘から、協議会をひとつの結束型ソーシャル・キャピタルと見た場合、宗教・祭りグループの活動はソーシャル・キャピタルの蓄積に貢献し、このことが当該地区のパフォーマンスを引き上げていると考えられることができる。



東日本大震災からの復興の思いをのせた青森ねぶた祭り。多くの人々の心を癒した

●橋渡し型の祭り
 昨年起こった東日本大震災の後の状況を見てみると、祭りは必ずしも結束型とは言えない側面がある。

祭りについての震災後の報道を見てみると、地域の復興・結束を図るためにだけ祭りが機

能しているわけではないことが分かる。福島県相馬市・南相馬市の相馬野馬追は、全国から同地に寄せられた支援への恩返しを発信するために行われていたり、昨年10月には、相馬野馬追の行事の一部が日本中央競馬会の栗東トレーニングセンターで披露されたりしている(※1)。また、南相馬市原町区では、昨年9月にいずみ太鼓(大阪府和泉市)や浅香太鼓集団「獅子」(大阪市住吉区)の2団体のメンバーなどが集まり、「和太鼓フェスティバル」と銘打って復興イベントが行われている。さらに、昨年は東北6県の夏祭りが一堂に会する「東北六魂祭(青森ねぶた祭り、秋田竿灯祭り、盛岡さんさ踊り、山形花笠祭り、仙台七夕まつり、福島わらじまつり)を仙台で開催し、今年は盛岡市で開催する予定で調整中である。これらの祭りやイベントは、橋渡し型として機能している。

*個人レベルでのソーシヤル・キャピタル

パットナムに対して、コールマンは個人のレベルに焦点を当てている。コールマンは次のように指摘する。社会には、道路などの物的資本や教育などの人的資本がある。これらが生産に貢献すると同様に、ソーシヤル・キャピタルも生産に貢献する。ソーシヤル・キ

ャピタルは人々の間の関係から発生するもので、義務と期待、情報チャンネルおよび規範の3つの形をとっている。そして、社会構造が閉じている(Closure)ときに形成されると指摘する。教育の場合、家庭内のソーシヤル・キャピタル(親の子どもへの関心が高いと親は子どもに教える。その結果、子どもの成績が良くなる)と家庭外にあるソーシヤル・キャピタル(宗教組織が母体となる高校ではドロップアウトの比率がより低くなる)の例を挙げている。このため、ソーシヤル・キャピタルの水準が高いと人的投資が高まる。

コールマンの議論にしたがえば、祭りは次のように解釈できる。祭りに参加する住民は知り合いであり、ほとんどの親は自分以外の子どものもとも知っている。このため異世代間と同世代間で閉じているネットワークが形成され、コミュニティの住民の結束が強くなる結果、住民同士の信頼感が醸成される。こういった環境は子育てに役立つとともに、コミュニティに一定の秩序をもたらすことになり、その結果、住民個人の人的資本が蓄積される。

*地域力

地域を活性化させる原動力として地域力(コミュニティ・キャパシテイ)の概念がある。地域力はコミュニティの問題を解決したり、コミュニティの厚生を増進・維持したりするた

めにコミュニティ内で利用可能な人的資源、組織的資源およびソーシャル・キャピタルの相互関係と定義されている(※2)。チャスキンの議論にしたがえば、地域力を発揮するための要素のひとつとしてソーシャル・キャピタルが位置付けられている。地域力は人々の厚生を引き上げるが、ソーシャル・キャピタルは地域力を形成するための必要条件ではない。したがって、ソーシャル・キャピタルが地域力を形成するための何らかの仕組みが必要になる。

地域力がその力を発揮するのは、地震や災害などにより危機的状態が発生するときである。昨年(2011年)の3月11日に起こった東日本大震災は、岩手県、宮城県および福島県などに甚大な被害をもたらした。このため沿岸部の地域は崩壊の際にある。そのような中で、祭りは地域の復興のために機能している。たとえば、先に言及した福島県相馬市・南相馬市の相馬野馬追は、その実施が危ぶまれたが、規模を大幅に縮小し、犠牲者の鎮魂と復興を願って行われ、地域の結束に貢献している。この場合、自発的に祭りが行われているが、さらに祭りの機能を高めるためには何らかの行政やNPOによる支援も必要であると思われる。

*祭りの及ぼす経済効果

これまで祭りの機能を定性的に述べてきた

が、ここでは祭りの効果を定量的に見てみる。

●フロー効果

たとえば、京都の祇園祭のような大きな祭りを考えてみる。全国から集まった多くの観光客はホテルなどの宿泊施設に泊まったり、レストランなどで食事をしたりする。さらに、山鉾の近くで売られているちまきなどを購入する。祇園祭のような大きな祭りでない小さな規模の祭りでも、同様の経済現象が発生

する。経済現象は具体的には、祭りによる売上の増加や所得の増加として把握される。こういった経済波及効果はフロー効果と呼ばれる。

大阪三大夏祭り(天神祭、愛染祭、住吉祭)は6月下旬に愛染祭から始まり天神祭、住吉祭と続き約1カ月間、夏に行われる。夏枯れと言われるこの時期にこれらの祭りがほぼ同時に行われるのは、経済効果を狙ったものではないかと推測される。



千年以上の歴史を持つ祇園祭で、山鉾巡行の先頭を受け持つ長刀鉾。祇園祭の価値は約1千億円

地域伝統芸能活用センター(2003)は、なまはげ柴灯まつり(秋田県)、会津坂下大伎引き(福島県)、雪中花水祝い(新潟県)など6つの祭りを対象として経済効果を測定している。これによると住民や参加団体を含めた実質的な実施費用に対する発生需要額は、2.31倍から12.05倍の間にあり、かなり大きい。ただ、ばらつきが見られる。見方を変えようと、やり方によっては経済効果を引き上げる余地があることを意味している。

●ストック効果

これまで述べてきたように、祭りをソーシャル・キャピタルとして捉えた場合、祭りは地域力を通じて住民の厚生を引き上げる。つまり、人々は祭りに対して何らかの価値を持つことになる。これはフロー効果とは異なる効果であり、ストック効果と呼ばれている。人々は祭りに対してさまざまな観点から価値を持つ。たとえば、武者絵が描かれた青森ねぶた祭りのねぶたや、岸和田だんじり祭りのだんじりに文化的価値を持つかもしれない。あるいは、将来生まれてくる孫のために祭りを残しておきたいというオプション価値を持つかもしれない。

伊多波・八木(2009)はこういつた観点

から京都三大祭りの価値を測定している。この分析によると、総便益は葵祭93.1億円、祇園祭99.9億円、時代祭88.3億円となる。そして、この中にオプション価値も含まれていることが示唆されている。

*おわりに

最近の幸福の経済学によると、人を信頼すると思っている人の幸福度は高い。祭りによって異世代間の交流ができ、さらには多くの人々が参加することによって一体感が確立される。つまり、人々の間に信頼感が醸成され、ソーシャル・キャピタルが形成される。このことは、結果的に幸福の程度を引き上げることにつながる。

しかし、既に指摘したように、ソーシャル・キャピタルは地域力を引き上げ、幸福度を高めるための必要条件であり、十分条件ではない。日本は、これから未曾有の少子高齢社会を迎えることになる。こういう状況の中でいかにして祭りを維持継続していくのか。行政やNPOなどによる政策的介入がますます必要になると思われる。

CEL

(※1)ここでの記事は、「朝日新聞」聞蔵Ⅱで検索している。新聞の発行年月日は煩雑になるので省略している。

■参考文献

- 伊多波良雄・八木匡「ソーシャル・キャピタルとしての祭り―京都三大祭りの経済的評価を中心に―」同志社大学ラ・ユリスタ研究センター、Discussion Paper Series, No.2009-02
- 上野真也(2009)「コミュニティの社会ネットワーク構造とソーシャル・キャピタル」熊本法政ジャーナル、vol.16-6
- 河田潤一訳(2000)「哲学から民主主義」NTT出版 (Putnam, R.D. (1993). Making Democracy Work : Civic Traditions in Modern Italy. Princeton University Press)
- 佐藤和彦・保田博道編(2006)「祭りの事典」東京堂出版
- 柴内康文訳(2009)「孤独なボーリング―米国コミュニティの崩壊と再生」柏書房 (Putnam,R.D.(2000) Bowling Alone : The Collapse and Revival of American Community.Simon & Schuster)
- 地域伝統芸能活用センター(2009)「平成19年度サービスマスター性向上支援調査 地域伝統芸能・行事等の経済波及効果と集客交流拡大支援調査」
- Chaskin R.J.(2001), "Building Community Capacity: A Definitional Framework and Case Studies from a Comprehensive Community Initiative,"Urban Affairs Review,vol.36,pp.291-323.
- Coleman J.S.(1988), "Social Capital In the Creation of Human Capital,"The American Journal of Sociology,vol.94,pp.S95-S120.

伊多波 良雄(いたば・よしお)

同志社大学経済学部教授。1952年生まれ。82年同志社大学大学院経済学研究所修了。主な著書は「公共政策のための政策評価手法」(中央経済社)、「貧困と社会保障制度―ベシック・インカムと負の所得税」(共著、晃洋書房)、「スポーツの経済と政策」(共著、晃洋書房)など。